



若手がグローバルで活躍するために

～国際会議参加支援プログラムの取り組み～



JPNICでは、早い段階から積極的に国際会議に参加し、経験を積めるように支援しています。日本から国際会議に参加する方および海外の技術動向に興味・関心を持つ方々を増やすことを目的に、国内の若手技術者・研究者に対して支援を行うプログラムを提供しています。金銭的支援、会期中のサポートだけでなく、会期前には事前説明会としてカンファレンス・プログラムの紹介等を行い、会期後には参加報告会として得られた経験や感想を共有する場を設けています。

2024年度は、9月に行われたAPNICカンファレンスと2月に行われたAPRICOT/APNICカンファレンスへの参加を支援しました。あわせて2025年3月に日本で行われた17回目のAPNG Campに協賛するとともに、役職員が講演者・参加者として参加し、若手フェロー2名の派遣も行いました。

本稿では、将来を背負う若手の活躍とあわせて、それを支える国際会議を日本で開催する舞台裏にも迫ります。

2024年度はAPNIC 58(ニュージーランド・ウェリントン)に3名、APRICOT 2025/APNIC 59(マレーシア・ペタリンジャヤ)に2名、APNG Camp 2025に対して2名の支援を行いました。国際会議の現地参加を通じて、彼らが何を感じ、どのようなことを学んだのか。以下に、参加者それぞれの体験談をご紹介します(所属は参加当時)。

APNIC カンファレンスとは※1

※1 <https://www.apnic.net/events/conferences/>

APNIC (Asia Pacific Network Information Centre) は、アジア太平洋地域においてIPアドレスとAS番号の割り当てを管理する団体です。割り当てのルールに関しては広くコミュニティから意見を募り、適宜更新されています。こうした議論を行う場として、1995年1月より定期的にAPNICミーティングが開催されています。



APNIC 58

フェロー

島田 怜奈

慶應義塾大学



APNIC 58への参加は、ルーティングセキュリティの最新動向をはじめ諸技術に関する洞察を得る上で極めて有益な機会となりました。特にROA/ROVの普及率にまつわる地域ごとの進捗と課題に関する具体的な議論は、IRコミュニティにおける多角的な視座を涵養する上で、示唆に富むものでした。また、同世代の参加者との対話を通じて、彼らのキャリアパスや専門的知見に触れることができ自分のキャリア形成を思索する上で貴重な糧となりました。本カンファレンスが初の海外カンファレンス参加となりましたが、国内の会合では得られない知見やネットワーキングを行う重要性を知り今後の活動領域を拡張する上での大きな動機付けとなったので今後も参加していきたいと思います。

橋場 慧志

大阪大学 大学院
情報科学研究科



ある講演者の“We are the Internet.”との言葉のように、インターネットを構成するのはRFC等の技術のみではなく人であるとの視点が最も大きな学びです。講演外で参加者の話を伺ったり、各国フェローの方々と交流したりと、APNICのコミュニティとしての側面を感じました。加えてOpen Policy Meetingでは、技術以外にも必要であるポリシー策定の過程を知ることができました。一方で技術面では、IPv6のみの街づくりの試みや、太平洋島嶼国のネットワーク環境、インフラのセキュリティ技術の動向についてなどが印象に残っています。特にインフラの講演は、他レイヤーの技術や経済との関連にも言及しており示唆的でした。

橋本 宏熙

東京大学



APNIC 58で最も学びになったのは、ネットワークやサイバーセキュリティの状況が国や地域によって大きく異なるという点です。特に印象に残ったのは、キリバスのCERTの方による発表で、各島が1本の海底ケーブルで接続され、ようやくCERTチームが立ち上がったばかりという現状に驚かされました。ディナーでさらに話を伺い、「やるべきことが多くチャレンジングだ」と語っていたのが印象的でした。この経験を通じて、ネットワークやサイバーセキュリティの課題は国ごとに多様であり、それぞれの事情を理解することの重要性を実感しました。もちろん、インターネット上でもある程度の情報は得られますが、実際に現地の方と対話し、直接話を聞くことでしか得られない深い学びや気付きがあると感じました。APNICのような国際会議に参加することは、グローバルな視野を養う貴重な機会であり、今後も積極的に参加していきたいと強く思いました。

APRICOT カンファレンスとは^{※2}※2 <https://www.apricot.net/>

APRICOTとは「Asia Pacific Regional Internet Conference on Operational Technologies」の略で、アジア太平洋地域において、インターネット基盤を強固に成長させるために必要となる知識と理解を養い、それをさらに高めることを使命とする技術カンファレンスの名称です。非営利組織であるAPIA (Asia & Pacific Internet Association)が、年に1度開催しています。毎年早春に開かれるAPNICカンファレンスと併催され、チュートリアル、ワークショップや各種技術に関するセッションを行い、この場にインターネットの基盤を構築する上で鍵となる技術者が集まることで、仲間同士や世界的なインターネットコミュニティのリーダーから学ぶことをめざしています。



APRICOT 2025/APNIC 59

フェロー

後藤 汰珠

長崎県立大学



APNICカンファレンスで一番学びになったことは「海外インフラエンジニアの風習や空気感を知れたこと」です。個人的な感想ではありますが、APNICカンファレンスでは単に技術やポリシーに関してディスカッションを行うような場というだけでなく、さまざまな背景を持つ人々が今後もインターネットをより良いものにしていくという精神性をコミュニケーションやフェローシップなどといった制度から感じ取ることができました。その中で、私は慣れない中、普段コミュニケーションをとることのできない海外で活動を行うエンジニアとさまざまな議論をすることで、本などといった資料から学ぶことができないような海外インフラエンジニアの風習や空気感を学ぶことができました。

丸山 彩雅

株式会社QTnet



カンファレンスに参加して一番学びとなったのは、APNICフェローとのワークショップで得た「伝えることへの自信」です。海外経験の浅い私は、英語でのコミュニケーションに不安がありましたが、このワークショップで自己紹介や議論、プレゼンテーションを重ねるうちに、言葉の壁を越える一歩を踏み出せました。ボディランゲージやアイコンタクトの重要性を学び、相手に「伝わるまで諦めない」という意識が芽生えたことは大きな収穫です。また、アジア各国のエンジニアとつながり、異なる視点に触れたことで、グローバルな視野を持つことの重要性を実感しました。今後はこの経験を活かし、技術者としての成長と業界の発展に貢献していきたいと思いました。

APNG Campとは^{※3}※3 <https://apngcamp.asia/>

APNG Camp Asia Pacific Next Generation Campとは、アジア太平洋地域の若手世代が国際的な視野と協働スキルを育むための次世代リーダーを育成するプログラムです。APNIC等の地域インターネット機関とも連携し、技術・社会課題をテーマに、多様な文化・背景を持つ参加者が議論と実践を行います。その17回目のキャンプが、2025年3月に日本（福岡県飯塚市の九州工業大学）にて開催されました。日本初開催となった今回は、24ヶ国・地域から約150名が参加し、技術・文化・社会の交差点に立つテーマ「What Can We Trust Today?」をめぐり、活発な議論と交流が行われました。



APNG Camp

フェロー

田中 伶佳

株式会社ラック



学びとなったこと。まず、AIやブロックチェーン、Web3といった最新技術が当たり前のように議論され、グループワークでもそれらが活用されていたことに驚きました。また、講演を通じて、最新技術がサイバーレジリエンスや著作権、経済など、さまざまな分野で用いられていることを学びました。加えて、ネットワークや生物化学、電力など幅広い業界が「トラスト（プライバシー・セキュリティ）」の課題に取り組んでいることを知り、技術と社会課題の結びつきを実感しました。英語でのグループワークなどで、図解などを用いて工夫して伝え合う経験も得られ、英語力や意思疎通能力の重要性を強く感じました。今回の経験を通じて、多様なバックグラウンドを持つ人々と、新たなものを生み出すことを学びました。

APNG Camp Japan 2025

飯塚から世界に「信頼とは何か」を問う、
運営メンバーが語る
国際次世代キャンプの挑戦

若手が活躍するその舞台裏で、その会議を主導したコアの運営メンバーにはどんな苦労があったのか—東京でも京都でもなく、あえて「飯塚」から世界へ挑む形となったこのCamp実現までの経緯、運営の苦労、そして手応えについて語っていただきました。



正田 英樹 氏

第17回 APNG Camp 2025
ローカル運営委員長、
株式会社chaintope 代表取締役 CEO



片岡 友香 氏

第17回 APNG Camp 2025
実行委員会共同委員長



Md. Mahfuzus Salam Khan 氏

第17回 APNG Camp 2025
実行委員会委員長

「きっかけは「日本で、飯塚で開催しよう!」発言から

▶まずはAPNG Campを日本で開催するに至った経緯を教えてください。

正田:2023年12月に、APNG およびAPNG Camp アドバイザーの松本敏文さん(元JPNIC副理事長)から突然「2024年2月にバンコクでAPNG Campがある。次は日本でやってほしい」と相談されました。その場所が「飯塚」であると。正直「本当にやれるのか」と不安でしたね。APNG Campは過去にタイや韓国などで開催されていて、レベルも非常に高い。地方大学で受け入れられるのかと。東京や京都のような有名大学がある都市でないと難しいと思いましたね。

▶実際に2024年2月のバンコク大会も視察されたそうですね。

正田:はい。九州工業大学の学生2人と参加しましたが、彼らは完全に打ちのめられて帰ってきました。自分の英語力の無力さ、議論のテンポにまったくついていけないことを痛感して。だからこそ逆に、「挑戦する価値がある」と思うようになりましたね。

テーマは「What Can We Trust Today?」
—技術と社会の交差点で

▶「信頼を問う」、今回のテーマはどう決まったのでしょうか?

Kahn:AI、Web3、ブロックチェーンなど、次々に登場する新しい技術を受けて、「何を、誰を信頼するのか?」という問いがバンコクでも議論されていました。APNG Campの実行委員会の中でも、社会課題やフェイクニュースなどとの関連も含めて議論を重ねて、自然につながりました。

正田:私がブロックチェーンを扱っている立場からも、「信頼」というテーマは非常に親和性が高かったです。Web3の観点も取り入れてほしいという希望も出しました。

運営の裏側 — 想像を超える準備と構成

▶実際のプログラムはどのように構成されたのですか?

片岡:3日間にわたり、基調講演、グループワーク、地元飯塚のローカルコミュニティ訪問(エクスカージョン)を組み合わせました。せっかくの開催なので、多くの人に有意義になるようさまざまな観点を考慮した結果、プログラム全体が非常にタイトで、運営側も「これは詰め込みすぎかもしれない」と感じるほどでした。

▶プログラム設計で工夫された点は?

片岡:セッション設計には特に力を入れました。招待講演は、専門家や技術者だけでなく、言語学者や高校生など多様な視点を盛り込むようにしました。高校生が発表しやすい雰囲気づくりのため、発表前にワークショップも開催しました。高校生が自分の言葉で

「信頼」について向き合って、発表してくれたことが印象的でしたね。私も若い方から学んだ、贈り物をもらったような体験となりました。

▶運営面でのご苦労はありましたか?

正田:「大変でした」の一言ですね。最終的に150人以上が参加し、運営メンバーは数名。ほぼボランティアで支えました。開催中に気を失ったことも。そして直後は体調を崩して寝込みました(笑)。人生経験の中で、圧倒的に大変なイベントでした。

Kahn:ビザ取得や移動手段など、飯塚にたどり着くまでに苦労した海外参加者もあり、サポートも課題でしたが、多くの方が自力で、しかも強い意志を持って参加してくれました。

フェロシップへの応募者はなんと1,200人超
— 想定外の人気と選考の苦労

▶海外参加者は、フェロシップを勝ち取って参加していますよね。そういうところからレベルも熱量も高い人が参加されたのではないのでしょうか?

Kahn:そうですね。フェロシップの応募数はなんと1,200件以上。特に東南アジアや南アジアからの応募が多かったです。

▶そんなに? 選考するのも並大抵の苦労ではなかったのではないのでしょうか?

片岡:AIによるエントリーシートの1次スクリーニング(盗用チェック)を活用しつつ、最終的には実行委員会のメンバーが一つひとつ人力で選考しました。性別や国籍のバランスも配慮しましたね。

▶日本でのキャンプということで、来日経験のない方の支援も必要だったのではないですか?

片岡:はい、そうです。言葉が通じない土地に来る不安、アクセスの難しさなどが課題でした。中には深夜に博多に着いて漫画喫茶に泊まる方も。

また、そうした来日に向けた移動の支援だけではなく、いきなりキャンプになじんでもらうのは大変なので、事前にZoomによるオンラインのオンボーディングでグループ間の交流を促進したり、会期中のグループワークをスムーズにできるようグループワークのやり方を説明したり、さまざまな工夫もしていました。その際に、Zoomに気軽につなげない国や地域の方もいたので、「最終的な合意形成はキャンプ中の議論を通して対面で行うこと」を念頭にオンボーディングには参加してもらい、ネットワークの格差による「置いてきぼり」を防ぐ配慮もしましたね。

日本の学生、海外フェローのリアクション

▶やる気にあふれた海外フェローを前にして、日本の参加者の反応はどうでしたか?

正田:それはもう、強烈なインパクトだったと思いますよ。いわゆるカルチャーショックですね。日本にいなが留学したのと同じような、ある意味人生観が変わるようなインパクトだったと思います。日本の学生が最初に「レベルが高すぎる」と逃げ出さないか不安でした。でも今回は「全員を同じホテルに宿泊させる」という工夫を取り入れました。これが功を奏して、学生たちは逃げずにやり切りました。そこでの交流も生まれて結果として大成功だったと思います。

片岡:特にバンコクのキャンプにも参加した九州工業大学の学生2名は、前回のバンコクでの挫折を乗り越え、今回はリーダーシップを発揮して、賞を受けるまでに成長しました。高校生の発表も、こちらの想像以上にテーマを自分ごととして捉えてくれて驚きました。

報告書づくりと今後への展望

▶お話を聞くとそのスケールと熱量に圧倒されますが、それを実現する労力や資金面は課題だったと伺いました。

正田:はい、本当にそうです。資金については企業版ふるさと納税でも資金を集める予定でしたが、行政の判断で白紙に。危機的な状況の中、最終的に九州工業大学と立命館アジア太平洋大学の補助金を活用することができて、なんとか開催にこぎつけました。

▶大変でしたね。でも振り返ってみて、それだけの手応えがあったように見えます。

片岡:短期間ながら、多くの若者が成長する様子を目の当たりにできたことが本当に大きな喜びですね。

正田:正直、飯塚での開催も最初は「田舎すぎる」と思われるのではと心配でした。でも、飯塚に拠点がある株式会社麻生の麻生泰会長からの温かいお招きで「麻生本邸でのウェルカムパーティー」を積み込んだことで特別感を出せました。麻生グループの方々にも炊き出しなど全面協力いただき、飯塚開催ならではの体験になったと思います。当初は不安だらけでしたが、運営側も参加者も、限界を超えてやり切ったと思います。今回の報告書も力を入れて作成しました。報告書作成にも費用や労力がかかりましたが、行政や次の開催地への「信頼の証」として残すべきだと考えました。

▶そうですね、「信頼の証」を残すことは有益なことだと思います。次の展開にもつながりそうです。

正田:そうですね。あれだけのことをなし遂げて、それで灯を絶やしてしまうのはもったいない。同じことはそうやすやすとはできませんが、福岡を拠点とした「ミニキャンプ」の開催を検討しています。定期的に若者の挑戦の場を設けて、次のジャカルタ開催につなげたい。今回の経験は、私たち自身にとっても未体験ゾーンで、レベルアップの機会となりました。

過去参加フェローの参加報告書はJPNIC Web^{※4}に掲載しています。またAPNG Camp 2025の300ページを超える開催報告書^{※5}も圧巻です。こうした若手支援の取り組みについては、2025年度も開催予定です。ぜひ若手の方は参加をご検討ください。また、こうしたプログラムに対しての協賛も募集しております。ぜひとも協力のご検討をお願いいたします。

<https://www.apnic.net/events/conferences/>



<https://www.nic.ad.jp/ja/intl/fellowship-program/#activity>



<https://www.apricot.net/>



<https://apngcamp.asia/17/>



<https://apngcamp.asia/>



※4 <https://www.nic.ad.jp/ja/intl/fellowship-program/#activity>

※5 <https://drive.google.com/drive/folders/1tj0V493i6BJ2Q8hFcdxCMmjg-riWu7s>